新書紹介

「ガボロジーとエントロピー」

エントロピー読本Ⅳ　別冊　経セミ

日本評論社　A5判　二二八頁　一、六〇〇円

私たちは仕事で市内の農家の人たちと会う機会がしばしばある。ある時、職場の友人が嘆いていた。「山の測量をしていると、空きカンが落ちているのがとても目につくんだ。それも、山の持主までジュースのカンを放り投げてるからしょうがない」

＊

別の機会に、農村の戦前のくらしを詳しく調査したことがある。驚いたことに、緑区や戸塚区の農家が都心部にまでリヤカーを引いて野菜を売りに来て、帰りには街の人々の肥・えを買いとっていったそうだ。大岡川には、し尿をためて売り買いする船まであったという。持ち帰った肥・えは、落葉やカマドの灰といっしょに畑へ入れたそうだ。

一方、農村の山林は、木材や食糧や肥料など、生活や農業資材の源であったという。今も、そうして山を利用している農家が少なからずいることを後に知った。

二つの話をつなぐと、町や村のゴミを生産に利用し、その収穫で人間が生活する、といった生産〜消費〜廃棄〜再生産の図式が描けそうだ。生産物・廃棄物の大半が自然の摂理に従ってできたものだから、こういうサイクルが成り立ったのだろう、つい二、三〇年前までは。

＊＊

エコロジストもエコノミストも認めるとおり、科学技術の進展と自然に存在しない物質や素材の開発・実用化は、史上始まって以来のスピードに達している。あたかも〝モノ〟が〝ヒト〟を追い越して世にあふれ、ゴミもまた〝ヒト〟を追い越してしまったかのようだ。私たちの生活の基本的な習慣は変わらぬまに、自然に返らない〝モノ〟が野山に散ってゆく。

以前、大黒ふ頭の先を通りかかったとき、広々とした埋め立て地の波打ちぎわに人工の地層が見えた。そのサンドイッチの間にはさみ込まれていたプラスチックやカンの燃えカスを見て、急に、何か後ろめたく不安な気持ちにつつまれたのを思い出す。

土や野山が見えない都市部では、こうしたゴミがたまり続けていることを知らなくても暮らしてゆける。せいぜい知るのは「緑がなくなった」とか「海が汚れた」とかくらいで、原因をさかのぼると自分が飲んだビールの缶だったりすることには、なかなか至らなかったりする。埋め立て地で感じた不気味さは、こんな矛盾を突然つきつけられてのことだと思う。

＊＊＊

子どものころ身についた習慣や感性を年月を経てから変えるのは、大変な努力と時間を要するにちがいない。ひとりひとりの習慣が集まって築かれる生活や社会の根本的なしくみ――あるいは〝文化〟――に至っては、なおのことだろう。

とすると、山へ空きカンを投げてしまう農家の行為は理解できなくもない。「ゴミは土に返す」と漠然とした思い込みがあるのかも知れない。

ガボロジー（ゴミの学）とエントロピーをめぐる問題は、ゴミ「公害」や環境汚染はもちろんのこと、その奥に横たわる私たちの生活レベルの文化と、科学や産業によって生み出される物質とのギャップを多くの面であらわにする。

＊＊＊＊

終章で藤田祐幸氏がいう「地域の自立」とそこに生きる人々の〈やくそく〉づくりは、まさに私たち自治体職員がかかえる個々の地域での課題ではないだろうか。庁内でよく聞き口にする「地域」や「文化」の根源は、こうしたひとりひとりの仕事や生活の態度に行きつくのだろう。だから、日常の行動に根ざした社会や自然に対する問題意識が積み重なってはじめて、これまたよく聞く「真の豊かさ」が自分自身や社会全体のものとなるのだと私は思う。

＊＊＊＊＊

ゴミと「豊かさ」を考えるための糸口は、私たちの日常生活にあふれていることをもう一度思い出してみよう。市民から研究者まで多様な人々の問題意識をまとめた本書は、そのときのルート・マップをいろいろな視野とレベルから提示してくれるにちがいない。

〈緑政局農政部農政課　江成卓史〉